

| 弘前市協働によるまちづくり推進審議会 会議録概要（第1回）                                                                                                                                                                                           |                            |                                                                               |                                                 |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------|
| 日 時                                                                                                                                                                                                                     | 令和8年7月6日（月曜日）18時00分～19時40分 |                                                                               |                                                 |
| 場 所                                                                                                                                                                                                                     | 弘前市役所前川新館6階 大会議室           | 傍聴者                                                                           | 2名                                              |
| 出席者<br>(21人)                                                                                                                                                                                                            | 委員<br>(14人)                | 小谷田会長、野口委員、奥野委員、下山委員、寺田委員、<br>山田委員、小森委員、相馬委員、安田委員、大塚委員、<br>葛西委員、神委員、大川委員、棟方委員 |                                                 |
|                                                                                                                                                                                                                         | 執行<br>機関<br>(7人)           | 市民協働課                                                                         | 對馬課長、山崎課長補佐、佐藤主幹兼協働推進係長、<br>工藤主査、吉田主事、山内主事、齊藤主事 |
| 会議概要                                                                                                                                                                                                                    |                            |                                                                               |                                                 |
| 1 開会                                                                                                                                                                                                                    |                            |                                                                               |                                                 |
| 2 委員・事務局員紹介                                                                                                                                                                                                             |                            |                                                                               |                                                 |
| 3 議事                                                                                                                                                                                                                    |                            |                                                                               |                                                 |
| 説明 （1）令和7～9年度における審議方針について                                                                                                                                                                                               |                            |                                                                               |                                                 |
| （2）書面による意見聴取の結果について                                                                                                                                                                                                     |                            |                                                                               |                                                 |
| （3）令和8年度の審議の流れ及びスケジュールについて                                                                                                                                                                                              |                            |                                                                               |                                                 |
| （4）本日（第1回）の審議の進め方について                                                                                                                                                                                                   |                            |                                                                               |                                                 |
| 審議 「市民主体のまちづくり」について審議                                                                                                                                                                                                   |                            |                                                                               |                                                 |
| 4 事務連絡                                                                                                                                                                                                                  |                            |                                                                               |                                                 |
| 5 閉会                                                                                                                                                                                                                    |                            |                                                                               |                                                 |
| 【各委員の意見等】                                                                                                                                                                                                               |                            |                                                                               |                                                 |
| 説明（1）～（4）については、委員からの意見なし。                                                                                                                                                                                               |                            |                                                                               |                                                 |
| 審議 「市民主体のまちづくり」について                                                                                                                                                                                                     |                            |                                                                               |                                                 |
| （事務局から説明）                                                                                                                                                                                                               |                            |                                                                               |                                                 |
| 会 長：はい。ありがとうございました。本日の審議内容は、まちづくりにですね、<br>いかに学生や子どもが参加するかということになるわけですが、この資料<br>5でもわかりますように、一応これまでも弘前市で、市民を巻き込むため<br>の事業というものは行われているということになります。こちらを参考の<br>上で、ワークショップをしていただければと思います。<br>それではですね、早速ですね。各グループごとに審議を始めていただけれ |                            |                                                                               |                                                 |

ばと思います。よろしくお願いします。

<グループ 1>

①まちづくりに関心がないまたは参加したいと思っているが何をしたいかわからない学生や子どもがどうしたらまちづくりに参加するか。

会 長：これについて30分ずつ、まずですね、①ですね、まちづくりに関心がない。参加したいと思ってるんだけど何したらいいんだかわからない。こういう学生や子どもたちがいたらですね、どうやって参加してもらうか、ということを考えてみようということなんです。どうでしょう。まちづくりに参加したいと思ってるんだけど何をしたいかわからない、どうしたら参加してくれるだろうか。これあの自由にどんどん発言していただいて。順番ありませんので。

委 員：まず今回これに関わって初めて、弘前のまちづくりのそういう市の条例があるんだというのがわかったっていうのが初めてということなので、それが我々でもそうなんであれば、弘前市民はもっともっと少ないんじゃないんですかね、1%の世界じゃないかなと思うんですけど。

会 長：いや、もっと少ないんじゃないでしょうか。私もこれ会長になってくださいって言われるまでですね、こういう条例があるの知りませんでしたので、ほとんど知ってる人いないですね。

委 員：そういうところからいくと、やっぱり学生や子どもたちを巻き込むというのはやっぱり学校からの組織から持っていかないと無理じゃないかなという。

会 長：なるほど。学校からということに。

委 員：学校というのは、学校の中にそういうようなポスターとか、チラシとか配るとか、それを親にも見てもらうとか、そういうふうなところから持っていかないと、我々おじいちゃんおばあちゃんというのはもう分からないというのがある。そういうところから、子どもたちから、我々に伝わるような情報が欲しいなと思います。

会 長：そうすると、まず学校への働きかけが必要かもしれないですね。

他にはいかがでしょうか。なんでも思ったこと、こういうのは正解、不正解は全くありませんので、思ったことをどんどん言っていただくというのが、よろしいと思います。どうでしょう。

委員：まず知らない方結構いっぱいいると思うんですね、このワークショップっていうのは。私みたいな人は多分。きっかけっていうのが多分分からないし、例えば市役所がね、提示したりっていうのが前提だと思うし、自分から進んでいってる人だったらいいんだけど、やってみたいんだけど、まず誰かと一緒にこうやるとか、1人でも気軽に入っていける。余白っていうかね、こういうところから軽く、シンプルにどの人でもいいよっていう感じの間口をちょっと広くして、そういうのからまずスタートなんじゃないかなっていう、こういうワークショップは堅苦しいっていうイメージがあるので、皆みんな率先してやりましょうっていうと、性格も皆違うし。

会長：やっぱりなるべく参加のハードルを下げるっていうふうに思います。他いかがでしょうか。何か感じたことはどうぞ。

委員：私が思うに、まちづくりってすごい簡単な言葉で言ってるんですけど、具体的にどういうことなんだろうって。範囲が広すぎるから何をすることがまちづくりなんだろうってちょっとわかりにくい気がします。そうですね。具体的に、例えばこう集まってどこかの草取りするとか、簡単な例えがあったほうが、じゃあこれはまちづくりなのかなって気軽に入ってこれるのではないかなって気がします。

会長：これ、大変いい意見だと思います。素晴らしい意見だと。まちづくりしろって言われたって何すればいいですかって。大工さんじゃないしみたいにしてしまいますよね。そうですね。まちづくりっていうのは、こんなことして欲しいっていうのは実は市の方から提示した方がいいのかもしれないですね。こういうことをやります、誰かやってくれませんかみたいな感じの方がいいかもしれませんね。

まちづくりのメニューみたいなものがあって。市民の人が見て、ちょっとやってみたいかな、ちょっと応募してみる、みたいな。そうしないと具体的に何をしたいかわからない。確かにそうです。

委員：まちづくりとか協働とかずっとこの会議やって出てくるんですけど、ち

よつとした参加したことで協働になってるとかあるとは思うんですよ。知らないうちにそれに参加してるっていう場合もあるので、結局子ども会もまちづくりじゃないですか。

まちづくりっていう言葉は知らないけど、実は参加してたっていうのもあるんじゃないかなっていうのは、そういうのも意識的に分かるようになってれば、まちづくりがあるんだっていうのが分かるっていうか、知ることができる。

会 長：まちづくりについて少し市の方から具体的に提示するのがいいかもしれないですね。何かこうまちづくりメニューみたいな。こういうことをしていただくだけでも十分まちづくりですよっていうふうに、示していただけるといいかもしれないですね。それで、例えば何日にこんなことやるんですけれども、参加していただける人はいませんかみたいな。候補があつて。そうすると出てますよね。

委 員：一応広報とかでは出てるんですよ。

事務局：一応ホームページとかでやってるんですけど。

会 長：多分あれなんですよ。これ2番目の話にもつながるんですけど、示すだけだと多分伝わらないんでしょうね。ここにインターネットを見れば書いてありますよって言ったって、そこまで行かないといけないわけですから。そうすると、こちら側から、例えば先ほど学校っていうお話がありましたけれど、働きかけをして周知してもらうということも必要かもしれないですね。いかがでしょう。

委 員：ワークショップって何だろうって結構難しく考えちゃうんですよ。緊張したりとかそういうことやっぱ皆が皆がやってる、さあやろうっていうわけじゃないので、皆でこう一緒にやらないと一人ではできないので、気軽に身近なイベントから、さっきの学校もそうですけど、どの人も平等に入れるイベントが大事ではないかと思うんですけれどもね。

会 長：そうですね。他にもまだまだ時間ありますので、思ったことをどんどん言っていていただいて、基本的に発言していただいて、あそこを書いていただいて、見繕って最後発表していただくみたいな感じですね。そうですね。自由に発言していただいて。

先ほど1つ意見がすごくよかったのは、多分市民の方は何をしたいのかわからないので、まちづくりってものを具体的に市の方から、提示するってのが大事ですね、こんなことをして欲しいんですよっていうふうに。それをホームページに書いておくというだけでは見てもらえないので、例えば学校というものを対象に働きかけるという努力も必要かもしれないですね。ただインターネットで見られるようにしておいて待つということだけでは誰も参加してくれないかもしれないということになりますよね。

委員：①の最初に書いてるまちづくりに関心がないっていう人は、もちろんそのホームページを探しにも来ないし、興味を持ってなんかっていうことは無いと思うので、先ほど〇〇さんが言った学校に働きかけるとかっていうんだったら、例えば学校って毎月のように学校だよりとかって出してると思うので、そののちよっと一部分をいただいて、毎月しつこいようにまちづくりとはみたいのを発信していけば、そういうことなんだっていうのが、子どもにも親にも理解してもらえるかなっていうのはちょっと思いました。

会長：そうですね。

委員：本当にまちづくりって何だろうと、そこが一番のテーマだ。それを子どもたちがわかるのはもっともっと難しいと思うんですよ。我々でも難しいんだから。それを少しずつ子どものときから教えていかないと。広がっていかないと思う。

会長：まちづくりとは何かっていうのをしっかり市の方が考えないといけないかもしれないですね。結構難しいですね、まちづくりとは何かと言われたら。

委員：さっき言われた子ども会でも何でもそうです。青年団とかそういういろんな活動、消防団もそうだけど、それもみんなまちづくりですよっていうのを、広く教えていかないと、これもまちづくりですよこれもまちづくりですよっていうのを教えていかないと。漠然としてまちづくりって何ってなると思うので。あなたも参加してます、この小さいものに。というようなやり方から進めていくといいんじゃないかなと思います。

委員：具体的に出てくれば、自分がやってるこれもまちづくりなのかもしれないと思ってもらえると思うので。やっぱりある程度こっちから具体的なものを出した方が付いてきてくれるのかなっていう気はしますね。

委員：中学校までそれができるんだけど、高校、大学となるともう。大学は向こうから来てる人ばかりで、弘前市民が少ないというのがあるので。それを考えるとやっぱり、小さいときから、小学校のときから教えていくのが一番いいんじゃないかなとは思っているけど。

委員：大学生とか高校生もそうなんですけど、その下の若年層の子どもさん、親御さんが例えば一緒に参加できれば。親御さんの方が、例えば弘前とか地元で長く生きていてアドバイスもできるし、これが一緒に参加したらどうか、おじいちゃんおばあちゃんとかと一緒に率先して話しかけて、こういうのはどう？と示すっていうのが参加するにはいいのではないかと。結構、親御さんの背中を押してあげて一緒にどう？ってやっていくのもいいのではないかなと思うんですけどね。

会長：そうですね。親子とか家族で参加できるような、そういうものがあればいいですね。確かにそうですね。そもそもまちづくりとは何かっていうのを市がちゃんと示さないといけないですね。それに、例えば親子や家族でみんな参加できる。いいと思います。

そうですね。これ今回の1番目はどうしたらいいか、どうやったらまちづくりに参加していただけるかということになるので、今までの話を踏まえると、市の方で、こういうことがまちづくりなんだよっていうのを示してあげると。人々の意識を高めると。待っているだけではなくて、学校等に働きかけて、家族や親子で参加できるような、そのような体制を作ることが大切かもしれない。

例えば、消防団っていうのが町の中で維持されてるっていうだけでまちづくりですよ。素晴らしいですよ。消防団ってのもある。すごいですよ。

委員：子どもたち向けの消防団の活動の中で、保育園とかに防災教育をやってあげる。

会長：それもまちづくりだと思いますね。

委 員：少年消防団ってあったよね。

委 員：まだあります。

委 員：楽器とかも送ったりして。昔はそういうので小学校区に楽器を送って、それで演奏してくださいとかって、消防団の方から、市の消防からっていう。

会 長：昔からやってることが維持されてるだけで、十分まちづくりだと思いますね。お祭りも本当にそうだと思います。

委 員：それに参加してたらまちづくりに参加してることになってるんじゃないかと思いますが。自覚はない中で。

会 長：なってますなってます。

委 員：今少子化で結構参加者が少ないんですが、大変。

委 員：うちのところも。でも結構、親子でいるんで。

委 員：だからまちづくりに関心がないわけではないと思うんですよ。

委 員：まちづくりを知らない。

委 員：知らないということで、関心がないまま参加しないと思っているのではなくて、これ、関心がないわけじゃなくて、わからない。という取り方の方がいいんじゃないかと私は思うんだけど、ここちょっとニュアンスが違うんじゃないかなっていう。

委 員：何がまちづくりなのかわからない、みたいな。

会 長：どちらかというとそうですね、何をしたいかわからないっていうよりも、何がまちづくりなのかがそもそもわかってないのかもしれない。よく考えてみたら、ねふたに参加したり、それだけでも、ひよっとしたらまちづくりに参加しているということにはなっている。

委 員：今回参加するまで、まちづくりって何って、あの分厚いものを全部見たけ

ど、そのまちづくりって何っていうのが1つも書いてないという。この条例って何、どれがまちづくりなの、弘前市を作っていくことがまちづくりだろうというふうな条例の文章みたいな感じにとらわれると全然思い浮かばないという。今みたいな感じで言われれば、結構みんなわかりやすいんじゃないかなという。

会 長：それは確かに。なかなかいいというか、意見の提示になるのではないかと思いますね。そもそもまちづくりってのは何かっていうことを市が示して、具体的にこんなのがまちづくりですよって示してあげると、それなら、参加してみようと思ったり、親子でやってみよう、家族でやってみようって思う人が出てくるということですよね。  
最初におっしゃられましたけど、まちづくりだと思っていなくて参加していることがまちづくりっていうことも十分あり得るわけですね。

委 員：この会議に参加して、消防団って協働っていうか、防災課と一緒にやるっていうところが。協働になってるってことはまちづくりなのか。

会 長：それはその通りだと思います。そういうものが維持されてるだけだと思いますね。普通は担い手がどんどんいなくなるっていうことが多いと思いますので、ちゃんと消防団が維持されてるっていうだけでも素晴らしいまちづくりだと思います。

あと、保育園みたいなところでもいろいろとなさってるんじゃないですか。例えば時間を設けたりとか、サークルがあったりとか。保育が終わった後に場所を開放してて、いろんなサークル活動が行われていて。保育園の中で時間決めて遊ばせてたりして、ああいうのもすごくいいと思いましたけどね。

食生活の面で言うとどうですかね。まちづくりに関して。

委 員：食改も、健康増進課だったり、市の色々な所と一緒に何となく教室とかやったりもするんですけども、やっぱり今消防の話聞いてて、それもやっぱり協働になるのかと思って、まちづくりにもつながってるんでしょうけど。

結局やっぱりそういうのも関心がない人、例えば何かやりますって募集しても、関心がある人はなんでもはいはいって来るんだけど、関心がない人がほとんどで、その人たちを吸い上げるのがとても難しい。関心がない人に働きかけるのってどうすればいいのかなっていつも考えながら

活動しているところですね。

会 長：関心がない人をどう巻き込んでいくか。そうですね、ひょっとしたらそういう人の方が多数派である可能性も。

委 員：とても多いと思うんです。関心ある人って何にでも関心あるから何にでも参加してくれるんだけど、関心ない人は本当にどこにも出てこない。お子さんだったらさっきの学校を絡めるっていうのは、とても必要なんだろうなって思いながら。

会 長：何か私の勝手な印象ですけど、そういうふうに関心を持つかどうかっていうのは、大人になってからでは遅いのではないかって気がしますね。成人してしまって、年を取ってしまったりすると、なかなか考え方って変えられないところがあると思いますので。少し小さい頃からですね、自分が住んでいる場所に関心を持つという意識を育まないといけないかもしれないですね。

あとこれなかなか難しい問題なんですよね。これ実は経済学でもよくある問題なんですけど、これって典型的な公共財問題っていうふうに言われるもので。要するに自分がやらなくても他の人がやってくれたら一番いいわけですね。そうするとこれただ乗りとかフリーライドっていうんですけど、まちづくりが大切だ、みんな頑張っ、これが一番楽っていうことになるんです。

これを参加させるっていうのは結構難しい問題なんです。みんなで使うものとか、みんなでやらなきゃいけないことっていうのはですね、人間はどうしてもですね、怠けようとしてますので、他の人がやってくれるならまあ助かったという感じになっちゃうんですね。だからとても難しい問題なんですよね。

そうすると、大切なのはですね、要するに自分のことだけを考えると、他の人にお任せしちゃうのが一番楽なんですよね。そうじゃなくて、自分のことだけ考えるんじゃなくて、周りのこととか公共のことを、そっちも大事だとか考えるという意識がどうしても必要になってくるわけですね。自分が一番いいこと。それが大切というふうになってしまうと何もしないのが一番になって、余計なことしないのが一番になって、他の人がやってくれるならどうぞやってください、やりたい人がやってください。私は別にやりたくないのっていうのが一番なので、これは子どもの頃から少し教育しないと。公共的な意識みたいなのは、やってくれないということにな

りますね。

それから学校と連携するのが大切かもしれないですね。問題は学校の先生ってお忙しいですからね。こういうことを言うと、忙しいんだこっちはって言われてしまう可能性もあるわけですよ。うまくできればいいんですけどね。

委員：私の場合はこのまちづくりのきっかけはボランティアなんです。イメージするのは、ごみ拾いとか、あと、高齢者施設の認知症の方とかのサポートとか話し相手とかそういうのがまずまちづくりに参加って。ボランティアっていうのは率先して自分でやればいいんだけど、やりたがらない人もいないですか。強制的だと嫌だっていう人、あと金銭でないと動かないっていう方も世の中にはたくさんいるんですよ。せめて一人でもごみ拾いとか話し相手とかでもいいんじゃないかなと思います。

会長：なるほど。ボランティアはそうですね。どういうふうにまとめましょうか。

②学生や子どもとまちづくり活動をしている主体（町会、活動団体、商店街など）を繋げるにはどうしたらよいか。

会長：それでは今のお話と関連してなんですけれども。先ほどもね、例えばここに働きかけないってというのは2番にも関連しているんですけれども、学生や子どもたちですね、そういう活動をしてる人たち。これをつなげるにはどうしたらいいか。このつなげるにはどうしたらいいのかっていうのは、もうちょっと具体的に言うとどんな感じですかね。

事務局：他市の事例だと、大学生の子たちが商店街と一緒にまちづくりをして、例えば新しい商品を作ろうとか、そういうこうやってる方に、例えば学生目線で、そういうの入れるとか、そういうふうにしてまた、まちづくり発展みたいな。

会長：なるほど。これは学生と子どもたちだけになりますか、対象は。

事務局：今日はそうです。

会長：普通の市民の方。

事務局：基本学生主体で。ちょっと限定的かもしれませんが。

会 長：学生、子ども、その親って感じかもしれませんが。割と社会と関わりたいっていう人って多いと思うんですよね。よく言いますけど、人間って社会的につながっていないと孤独を感じる生き物ですので、社会とのつながりって大抵の人は求めているんですよね。基本的に人間は孤独が嫌いな生き物です。

この社会とのつながりも、なんていうか、市が提示してあげるとですね、喜んで参加したい人は結構いると思うんですよね。先ほど動かない方もいるっていうのありましたけど、動かない人も実はつながりを求めたりするんですよね。面倒くさいことはやりたくないけれども1人でいるのは寂しいみたいな。だから、上手に誘導するとですね、かなりの人が参加してくれるんじゃないかとは思いますがね。

ただでもこれ学生が中心ですので、今の話では。学生と子どもたちをつなぐっていうことになると、どうするかってことになりそうですがいかがでしょう。

委 員：この商店街ってここにあるんですけども。この商店街って言えば弘前、土手町も駅前も、駅前も今解散の危機、大町も解散の危機。土手町だけという感じで。商店街自体が無くなっちゃってるというふうな、駅前方面は。土手町は何とか今、そういうことでやってくれているというような話を聞いて、後のところはもう今解散の危機だと。こういうのがあるのでこれ商店街というのはちょっと無理だなと。

会 長：弘前は城東に商店街ってありますか。

委 員：ない。

会 長：ないですね。

委 員：駅前と大町商店街、土手町商店街というこの3つだけなんですよ。

会 長：西弘の方はないんですか。

委 員：西弘も昔はあったんですけども、今は飲み屋街というかあそこの人たちで

商店街を作って、夏祭りをやってるという感じ。昔の商店街じゃなくて、飲み屋さんだけになっちゃったんで、飲み屋さんだけの商店街。昔は品川町とか百石町とか商店街とかいっぱいあったんですけど、百石町は何とか夏祭りやってるから、そこと組み合わせて商店街はできるという。

ただこの1%システム事業で9事業というのがあるんですけども、これは本当に大学生とか高校生がそれこそ1%の補助金をもらって、土手町でお餅をやったりとか、そういういろんなことをやってくれてるのが今少しずつ増えてるという、弘前で何か、弘前を盛り上げたいというふうにして活動してるのが、毎年増えてるというのが実態です。

会 長：なるほど。そうすると、商店街に任せておくと商店街自体がなくなってしまっていること。

委 員：自分たちで商店街を盛り上げたいという学生が今、一生懸命ね、高校生も何団体か入ってる。

会 長：そうすると、これまで商店街がやってたようなことを学生が代わりにやってくっていくことが必要なのかもしれない。

委 員：すごいいいことやってる。1%の補助金もらって。

会 長：商店街がなくなっちゃうっていうのも、今初めて知りました。

委 員：活動団体の中にも、学生とかボランティア、弘前大学ボランティアとかそういうところに呼びかけて、それをいっぱい引き込んで、子ども食堂とかいろんな、それもまた1%からお金をもらってるんですけども。それで一生懸命活動してくれてるところが、今いっぱい出てきてるってことであればすごくいい。

会 長：弘前大学に学生団体っていくつかあるんですよね。その大学の学生団体と市の方がお話し合いをして、何かやっていくっていうのが大事かもしれないですね。あと弘前大学にはボランティアセンターがありますので、そちらを使ってやっていくと。そうすると学生団体や、すでにある組織と市がよく話し合って、事業について検討していくのも大事かもしれないですね。

委員：この１％システムは本当にまちづくりのための一番いいシステムだなと私は思ってる。うん。審議して見てて。

会長：なるほど。そうすると、これ１％枠っていうのはあれですかね、市の方と一緒に話し合ってやってもいいんですかね。

事務局：基本、案は自分たちで作っていただいてそれに対してアドバイスとかはするんですけど、自分たちがやりたいんだっていうことを審査委員会の場でプレゼンしていただく。

会長：これを積極的に使って、学生団体に頑張ってもらう。何かこう学生団体を誘導したら反則なんですかね、こういうことやって欲しいんだけどって。

事務局：それはちょっと趣旨とはずれる。自分たちで考えて実行するということに重きを置いているので。

会長：そうすると、これにこだわらなければいいわけです。この１％システムにこだわらなければ、市が例えば学生団体にこんなことをして欲しいですって言って。だからそういうことはその補助金は置いといて。

事務局：これはまた別枠で。

会長：やっぱり学生がやろうとしていることと、市の方がやって欲しいこととすり合わせるっていうことも必要かもしれないですね。それで弘前市が例えば、さっきもありましたけどメニューを提示するみたいな。こういうことをやって欲しいっていうことを提示するって言いましたけど、これを例えば学生団体に、弘前市がこんなことやってくれると助かるんですけどって提案すると、そうすると、学生団体がですね、じゃあそれやってみましょうか、ということになるんじゃないか。これお金がかかるやつはね、これはあんまり一緒にやると反則になるかもしれないですけど、これとは別で。

事務局：なんかそういうのでやったことによって、次は自分たちでやりたいなって１％システムの申請に来てくれれば嬉しいです。

会長：なるほど。先ほどともつながりますね。やっぱり市の方からの働きかけが

大切かもしれないですね。学校とか学生団体に対して。こういうことをやって欲しいんです。こういうことがまちづくりなんですぜひ一緒にやりましょうみたいな。市がまちづくりとはっていうのをしっかり定義することが必要かもしれないですね。市の方から、学校や学生団体に働きかけて、こういうことをやってくれないでしょうかみたいな。そうすると、学生たちがじゃあやってみましょうかってなるんじゃないかと思うんですね。思うんですけど、学生団体も何やったらいいかわからないんじゃないでしょうかね。そうすると市がこんなことやって欲しいんですけどっていうと、喜ぶんじゃないでしょうか。どうでしょうか。

委員：例えば市役所でこういうふうな見本っていうか、例っていうのかな、こういう状況下でいろんなパターン化して、こういうのもいいですよ、こういうのもいいですよっていう形。一本化するのではなく、例えばこういうのやりたい人はこういうパターンっていうのを何パターンか提示してあげて、私はこっちやってみたいって手挙げて。

本当につなげるまでにも、何しようかっていう感じの状態じゃないですか、この文面見ると。やはりこれいろんなパターン化して、まず見本を見せないと何も進めないじゃないか。これやっぱ市役所が公共的な場所で、例えばモデルの人がこういうのがいいですよっていうのをまず見せてあげるっていうのも、どうかなと思うんですけど。

会長：モデル事業みたいなもの。

委員：その方が私もって手挙げてくれるんじゃないかな。

会長：まちづくりに関してのモデル事業ですね。

委員：難しかったものが、ちょっと背伸びだけれどもちょっとやってみようかなって思う。

会長：あとちょっとと思うんですけど市役所ってインターンみたいなのがってますよね。そのインターンにこのまちづくりやってもらってできるんですかね。インターンの事業として。

事務局：市民協働課に来てくださる方は毎年いて、そういう方には例えば1%システムの事業があれば一緒に見に行って、レポートを書くとかそういうのは

やっています。

会 長：インターン結構いいんじゃないかって思ってるんですよ。だから市民協働課あたりにインターンで来てもらって、大学生に。そうすると、もうこれ絶対やる気のある子しか来ないわけですから、やる気に溢れて早く何かやらせてくれって来るはずなので、そういう感じで例えば今のモデル事業っていうのをつなげて。

例えばまちづくりに関して、こういうことやるっていう計画を立てて、インターンを募集して、大学生がやってきてですね、その事業を行ってみるとか、そういうのもいいんじゃないかと思うんですよ。あとはありきたりですけど、とにかく大学生はSNSを見て生きてきているので、まちづくりに関してのSNSみたいながあると、いいですね。

事務局：インスタやっているんですよ。

会 長：どうですか、反応は。

事務局：うーん。若い人はあんまり。

委 員：QRコードだけポンってどこかに貼っておくといいんですよ。何だろうって。何も書かず。

会 長：そういうSNSとかで報告があるといいですよ。まちづくりでこういうことあって、こんなことやりましたみたいな。これ見せるにはどうしたらいいでしょうかね。こんな偉そうなこと言ってますけど、私インスタほとんどやってないんですよ。SNSはなるべくですね、避けようという。やっぱあれは恐ろしいものですからね。時間泥棒。あれやり始めると仕事できなくなっちゃうんで、できる限りですねSNSは遠ざけるようにして生きようと思ってます。時間泥棒ぶりともないもので、だからインスタほとんどやってないんですけど。

委 員：これインスタやってる人だったらスレッズも入ってきますよね最近。どんどん入ってきますよね、例えばユーチューブショートみたいな感じで。バンバン入ってきて作業が進まないんですよ。関連いっぱい入ってくるんですけども、途中でここでやると魔物ですよ。フォローしてない人も入ってきますよね。

会 長：あれは馬鹿にできないんですよ。教員の立場で言うとはですね、大学生ってみんなガクチカってやつをですね、悩んでいるわけですよ。これを使えるっていう。ガクチカってご存じですか。ガクチカっていうのはですね、就職のときに、「学生時代に最も力を入れたことは何ですか」っていうのを、別名ガクチカっていう。

委 員：消防団にもいるんですよ。活動に参加していないのに名前だけあるっていう人が。

会 長：大学生のですね、みんなもうこれはですねこの4年間悩むんですよ。これほとんど絶対聞かれるので、就職活動で何を一番頑張りましたかっていうのを。これを使っていくとはですね、ノリがいいんですよ。大学生にやらせるときはこれガクチカで使えるからって言うとはですね。そうですかって。だから教員の立場でいうとこのガクチカとインターンですよ。これをうまく使うと大学生は喜ぶかと。

あと学生団体に、こんなことやって欲しいって働きかけると。既に団体があるので弘前大学に。そこに弘前市の方がちょこちょこ出かけて行って、お話をして、こういうことやってくれるといいんだけどっていう入れ知恵をするといいかな。

あとちょっと思うんですけど、あれがありますよね、地域おこし協力隊。まちづくり専門っていう人を呼んでくるわけにいかないんですかね。要するにですね、さっき学校に働きかけるとか、学生団体に働きかけるとか、インターンでどうこうとか、これ市役所の方がやると大変なんですよ。市役所の方、お仕事あるわけですから、プラスで仕事が増えるわけですよ。だから、市と市民を接続するっていうことを、専任である人、俗にコーディネーターってやつですね。あれがいるといいんじゃないかなと思うんですよ。

調べたんですよインターネットで他の地域。そしたら結構、まちのコーディネーターみたいな人がまちづくりやってるっていう。なんか横浜の方でうまくいってる例が、なんかネットに出てたんですけど。こういう人がやっぱり、必要ではないかと。この人たちが学生団体とか学校とかそういうところに出かけて行って、市と市民の接続みたいなことを考えるっていう。

それであと結構思ったのは、最初にまちづくりとは何かって言うのが、ありましたよね。これは一から考えるのって結構大変だと思うんですけど、

これまでの実績をですね、全部こうまとめていくと。まちづくりとは何かっていうのが見えてくるような気もするんですよ。どっかにまとめられてたりするんですか。これまで行われたこと。

事務局：1%システムの方は、毎年事例集とってこういうことやりましていうのを冊子にしてる。

会長：それが蓄積されていくと。そもそもまちづくりとはっていうのが少しイメージしやすくなるかなあと。これまで行ったことですね、これをまとめていくみたいな。そういうのを冊子にして、その学校とかに配ったっていいと思うんですよ。これが、弘前のまちづくりみたいな、これまでの事例集みたいな、それでやってみましょう。

ここはコーディネーターは必要だと思いますね。これ多分、いろいろ市の方頑張ってくださいっていうのは結構しんどいのではないと思うので。

事務局：中間支援組織で団体、NPO法人さんがやってるところとかもあるんですよ。都会で。つないでくれる。

会長：そういう人がいるといいですね、地域おこし協力隊でこういうことやる人いないですかね。

事務局：協力隊はでもその地域で配属なので、そこに関してはまちづくりをしてる方とか、相馬地区とか、岩木地区でこういうことをしたいとか。

会長：弘前市全体とかはないんですか。

事務局：全体、どうだろう。割と地区が決められているかもしれませんね。

会長：そうか地区ごとなんですね、でも誰か専任の人がいるような気がしますね。だって、市の方もどんどん代わるじゃないですか。2年ぐらいで代わっちゃいますよね。市の方は2年ぐらいで移っちゃうし、大学生は4年がいなくなっちゃうし。そうすると継続して見る方がいない。

## <グループ2>

①まちづくりに関心がないまたは参加したいと思っているが何をしたいかわからない学生や子どもがどうしたらまちづくりに参加するか。

委員：よろしくお願いします。それでは①のテーマにいきたいのですが。ちょっと私、特にまちづくりに関心がないけど、参加したいと思ってるけどどうすればいいだろうっていうか、最初、まちづくりに関心がないよっていうのを、いかに巻き込んでいくかということにご意見をいただければと思います。

みなさんの身の回りや自分のご家族を見回してもいいと思うんですけども、結構関心がないということのを思い浮かべたうえで、その人たちがどのような働きかけだったりテーマだったら興味持つかみたいな。

委員：今まさに、うちの家族はねぷたに参加しに、お囃子の練習に行っているわけですけども、こういう地域の祭りにも関心をもっていたきたいというのと。これは教育機関の方がいらっしゃるので言っているのかどうなのかというふうに思うんですが、高校3年生の家族がいて、この間、高校総体の期間に清掃奉仕活動があったんですが、応援に行かないで清掃奉仕活動に行くのかと聞いたら、自分が進学のための受験をするのに評価されるから行く、ということで3年生が今慌てている。

こういうふうに参加するのも評価されるからっていうふうに、一応学都ですし、沢山いろんな評価を受けて、行きたい学校に評価してもらえらる事項が増えるっていうのを、たくさん弘前市は持ってますよっていうのを、高校や中学校に周知していただければ、動機は不純ですけど参加する人は増えるのではないかと思います。

委員：推薦対策上ということもあるかもしれないですね。

委員：3年生とかじゃ遅いわけじゃないですか。なるべく早いうちに、中学生とか高校生の1、2年生のうちにそういうのがあって、成績ももちろんだけど、まず学力もそうですけど、その人というのをも評価して、子どもを評価してもらおう機会をたくさんもって情報発信すればどうかな。

委員：そこで例えば、〇〇さんは高校生からもともと関心があったのかなと。

委員：高校2年生の時に、企画課がやっているまちづくりのステップに所属していて、結構、推薦でもこういう形があるよっていうのはもともと伝えられてたので、まちづくり面白そうだなと。

委員：自分の娘の場合は推薦で入ったんですけれど、スポーツも部活もやっていたんですが、体の都合上できなくなったら、先生がYWCAみたいな女性のボランティア支援っていうか、そういう活動に入れて、生徒会に入れて、というような先生がいろいろ指導してくださって。大学を受験するときは推薦事項が沢山あって、どれを削ればいいかなっていう感じで先生が悩まれたと言っていたので、大学に推薦で入ったんですけども。  
孫の話なんですが、先生がお子さんはこういうふうにやっていった方がいいよって。家族が言うのって、うんって聞かない。学校の先生が言うのは確かなんですよね。

委員：私の父親も先生で、こういうのあるよって言われたらやっぱり、やりたくなと思う。

委員：〇〇委員、たとえば弘前学院大学の場合、地元の進学割合が多いと思いますが、弘前出身とかこの界限の方でそういう高校時代になんかそういうのをやっていましたみたいな、そういう方は身近にいますか。

委員：すぐには思い浮かばないんですが、それこそ祭りなんかはねふたやねふたを熱心にやっている学生は多いと思います。

委員：私も知り合いの学院大学の男子学生でねふたの絵を描いている2年生がいます。

委員：はい。大学に飾られてますよね。

委員：ステップとか企画課が準備して企画したものとかも、行きたいなって思う人もいれば、どうしようかなとかあんまり興味ないなみたいな人も多分いたと思うんですよ。参加に迷う人とか、ちょっと興味なさそうな子でも、他に何か興味ありそうな分野とか、見渡してみてありますか。

委員：私の時のステップは、自分の好きなことやっていいよということが結構多かったんです。

委員：参加者は結構多かったんですか。南高校が結構多い印象だったんですけれど。

委員：私のときは中央高校と南高校が同じくらいで、去年出席した時は南高校の学生しかいなかった。でもなんか、情報共有が足りないのかなと思って。知らない学生もいれば知っている学生もいるし。  
ただポスターを飾っているだけだと伝わらないから、さっきお話したように学校の先生とかが、しっかり周知してくれれば、最初に興味がなくてもだんだん入ってきてくれるのかなと、ちょっと気まずいですけど、先生次第なのかなと思います。

委員：ちなみに、弘前学院大学の事情もちょっと伺いたいんですけども、今ちょっと地域側から相談されているのが、やっぱりコロナ禍前であれば、オンラインツールもあまりなくて、掲示板に情報を貼って、それを学生が見てそれを共有するという形だったんですが、今、それが無くなってしまって、全部SNSとかのWeb上での情報発信になった時に、なかなか情報が共有できなくなってしまったことがあって、地域側もどういうふうに学生に届けばいいのか分からないというのを、現在進行形で聞いています。

委員：今はティックトックみたいなものでないと見ないでしょう。

委員：学校の専用メールアドレスは、基本見ない人が多い。

委員：インスタグラムのようなものに広告をしっかりとお金を出して出せばいいんですが、お金がなくて高校生に情報が届かない。学生向けの周知ってどんな感じですか。

委員：T e a m s がLMとか授業関係のやっぱ連絡なんか楽で。基本的には学生との連絡はT e a m s でやるという感じです。学生とやりとりするのもT e a m s のチャットで基本的にはやりとりします。

委員：地域側は先生としっかりと人脈を作っておかないと、学生に情報を届けられないみたいな。

委員：塾の先生は情報持ってますよ。塾の先生の情報量はすごいですよ。何で知ってるんだろうというような情報を知っていますよね。

委員：塾ともしっかりとパイプをつくっておいて、情報を流すのが高校生向けには良いのかもしれません。

委員：内心をつつくときはね。うん、でも地域に参加するっていうのはやっぱりお祭りを利用した方が。でもコロナ禍以前より、私の地域でもそうですが、地域のお祭りはなくなっているの。

委員：ここは逆に高校生からこの前相談を受けたのが、部活が忙し過ぎて、そういう地域活動に出にくいと。

委員：私は前半ソフトテニスやって、後半は放送部に入っていましたけど、色々あって。放送部は結構時間に余裕があって、同じくらいの熱量でやっていたんですけど。言いたい事としては、まちづくりを部活動として組み込むこと。結構、まちづくりって難しいとか、そういうイメージがあって、部活として組み込めばよいと思います。一応、ステップっていうのは部活ではないんですけども、まちづくりクラブやサークルのようなものなので。

委員：ちなみに当時の男女比はどうでしたか。

委員：男女比は男が少なかったです。でも今は半々くらいでした。

委員：男の子が参加しやすいまちづくりとかって多分あるのかなという感じがすけども。〇〇委員のお孫さんをちょっとイメージしちゃうときに、何か参加しやすいような取り組みはありますか。

委員：彼はにぎやかなのが好きだからお祭り関係でしょう。

委員：私はどっちかというところ系ですね。

委員：よさこいですものね。

委員：いろんな形で関わるのがあり得るのかなと。

委員：一体感でまとまるんでしょうね。

委員：今年1年生でも沖縄から来てる学生さんがいるんですが、面談とかしたときに、春夏秋冬の四季を沖縄よりも弘前のほうが感じられると。4月のさくらまつりに感動したと言っていました。そういう方が、そのあと何か参

加できるような仕組みはあるんですか。例えばさくらまつりに感動した県外の人が。

委員：そこら辺が多分、そのステップっていうのは通年でやるやつで、もう少しハードルが低めな単発もしくは2回ぐらいのものはないのかな、という相談を高校から受けたことがあります。

委員：昔はJRCがさくらまつり期間中に車椅子のボランティアとかっていうのをやってたんです。でも、それこそ2世代以上前のことで、中央高校とか工業高校とか、そういう活動がありましたね。

委員：あとちょっと思うのは、これ高校も大学もなんですが、先生って必ずしも弘前出身ってわけではなくて、意外と学校と家の往復しかしてなくて、地域のことがよくわからないというところで、私も弘前大学にいたときに、新しく来た先生に地域のつながりとかを教えるために連れていくとか。あまりそういうふうにやれる人はいないなと思います。高校や大学の新しく来た先生、地域を紹介するみたいな。

委員：あんまりそういう形で、声がかかることはないですが、コロナのちょうど終わりかけだったところもあったのかもしれない。なかなかそういう機会も、ねぷたも3年前にようやく復活とか何とかそういう多分あった時期だったかもしれないんですけど。

委員：小学校から6年間かけて知識を学んでいくとか、低学年からまだ知能が発達してないから知識を詰め込んでいく、中学年になったら実際に地域に出てる人と一緒に何かをやってみる、高学年になったら何か自分たちで考えて、大人も混ざって自発的にやる。っていうのを、言い方が悪いんですけども、強制的に学校で行うものとしてやれば結構まちづくりって地域の密着度と関わっていると思うんですが、地域への愛着も増して、やりたいと思えるのかなと思います。

委員：〇〇さんが小学校の時は地域に入っていくような総合の授業みたいなのはあんまりなかったんですか。

委員：あったんですけど、ただ、学ぶだけ。ただ感想文書いて、話聞くだけだったのが、ちょっとつまらなかったなあと。

委員：農業体験はなかったんですか。

委員：りんごのやつはありました。だけど感想書いて終わり。

委員：小学校とか中学校とかの先生ももう少し地域に入って、もう少し学んでいければいいんですが。

委員：先生から改革ですか。

委員：小学校から中学校にその情報だけを引き継ぎするんじゃなくて、先生同士でそういう情報共有が結構大事な感じが。

委員：地域の人脈とかを引き継いでいくと。結構、先生というのが大事だという感じがします。

委員：ちょっと今は難しいですね。働き方改革で労働の感覚が変わってきているし。実は娘が教員をやっていて、下北で。

委員：僕がこっちに来てびっくりしたのが、若い先生が少し少ないなと思って聞いたら、やっぱり下北とかあっちの方に単身の20代の先生は全部行かされちゃう。中央高校や南高校、弘前高校が、やっぱり結構、ベテランの先生ばかりになっちゃって、結構生徒に寄り添うことが難しくなったという話を聞いたんです。

委員：若い先生はいないですね。私は若い先生から教わったことがなくて、結構ベテランの40代、50代とか。

委員：中学校からもそんな感じですか。

委員：中学校もそんな感じでしたし、小学校もそんな感じでした。

委員：小学校は若い先生はそんなにいないのですか。

委員：いないです、すぐ異動してしまう。

委員：中弘南黒地域は昔から若い先生あまりいない。

委員：西北とか下北の方に行かされてしまう。

委員：でも今は、各地域で教育委員会が違いますよね。

委員：ただ、やっぱり向こうが圧倒的に教員不足っていうことがあって。八戸、青森、弘前が多いんで、下北とか深浦とかが少ない。

委員：自分の先生も若い時に八戸に異動したことがあるって聞いた。

委員：小学校の頃から若い先生がいなくなっている印象があったということかな。

委員：新卒で入ってきた先生は1年ですぐに異動してしまった。

委員：その辺はやっぱり、若い先生だと大学でそういうワークショップを習ったりとか、地域に入っていくとか、やりやすいと思うんですけど、ベテランの先生だとちょっと困っているという感じでしょうか。

委員：分かりました、色々と悩んできましたね。

委員：どうまとめたらいいかわからない。

委員：意見をバーッと出す感じでまとめましょうか。

委員：本当に、〇〇さんが言ったと思うんですけど、情報が届いていないケースが結構あるなって思うんですけど、そこを高校生、大学生にどういうふうに情報を届けるかというところの中身をまずは出したいなと思うんですけど。お孫さんとか、教え子さんとか、自分とか、振り返ってみて、こういった発信はどうかなというのは。

委員：最初でしょうね。入学した最初に学校側が成績はもちろんだけれど、そういうのに参加した者を評価する、みたいなシステムがありますよといううな。早い方がいいです。

委員：地域にどんどん入ってくることが、今後の自分の進路とかにもつながってくるよという感じですか。

委員：自分の地域じゃなくても、例えば、弘前全体のどこかでもいいですし、自分が興味がある部門、お祭りやスポーツの部門で企画をどう持つか。教育委員会と横のつながりがないと難しい。

委員：〇〇委員の場合、弘前学院大学の全員に広く周知する方法はあるのでしょうか。

委員：T e a m s での連絡以外ではなかなかないです。T e a m s を使えば、全学生、全教職員に届く仕組みにはなっています。

委員：インターンシップを受けてくださる事業者が沢山あるのが大事ですよ。学生が選択肢を増やすために、方向性を増やすためにいろんなところで検討して、いろんな考えが広がるのに、を受けてくださる企業が少ない。

委員：同感です。

委員：小学生とか中学生のときの勤労仕事体験というのがあるんですか。

委員：それがちょっとあるんですよ。

委員：県内ではあまりやっていない感じがしますね。

委員：〇〇さん、学生向けの情報発信とかどうですか。

委員：真面目に発信するのではなくて、面白みを持たせる場所ですかね。

委員：学生にとっての面白みというところと、事業者とか使役側の面白みが、ずれがあるかもしれないから、学生がしっかり伝える必要があるのでは。でもやっぱりインスタグラムとかティックトックとかSNSをしっかりと使い直すっていうか、しっかりそれをしていかないと、情報届かないよっていう認識を、地域がしっかり持つっていうのが必要。そのSNSをしっかりとすることもだし、そういう情報っていうのも何でもいいのかって言ったらそうでもない中で、やっぱりインターンシップっていうのは高校

生や大学生の就職で大事なので、そういう関心を持つようなところのインターンシップをもう少し充実させていこうとか、先生にうまく寄り添っていくとか、先生同士でも〇〇委員が言ったように人脈を引き継いでくるとか。

あと〇〇委員がおっしゃったように、高校とか中学校入学のタイミングで、大人やその地域に関わる良さなどにもう少し関わるようにするとか。あと、地域側としてもSNSの重要性を認識して、子どもたちに響きやすいような発信を心がける。

②学生や子どもとまちづくり活動をしている主体（町会、活動団体、商店街など）を繋げるにはどうしたらよいか。

委員：②に行きたいと思います。学生や子どもとまちづくり活動をしていきたい町会活動など、つなげるにはどうしたらいいか。実際ちょっと①のところでも何かやりたいなというふうに思うような行動とかがあったとしても、どこに何があるかわからないみたいな、ちょっと出たかなって気はするんですけども。

高校を振り返ってみてどうですか。それこそ僕も探求の授業を、お邪魔させてもらって結構、中央高校とかって、生徒個人の関心事に結構深掘りをしてく、大学の卒論の小さい版みたいにやってみて、ただそのテーマによっては先生もつなげられるところもあれば、例えば国際系とかいろんなそういう工学系みたいになっちゃうと、そこに人脈がなくて、先生がつなげられなくなってしまうと聞いたんですよ。〇〇さんの高校時代とかで、そういう地域に関わりやすい人とそうでない人といいましたか。

委員：高校の時は、結構、最初なんか食べ物のことやって、そしたら、やりにくくないって言われて、私は土手町の活性化をやっていたんですが、先生次第でシフトされたんです。土手町は通学路だったのでもともとシャッターが閉まっている店が多いなみたいな感じでした。

委員：最初は食品系に行きたかったというのが本音としてはあるんでしょうか。

委員：栄養のこととか。やりにくいということもあるし。

委員：先生たちにとって、ちょっと深掘しにくいケース。

委員：多分そうだったんですね。

委員：そこは自分も学生からも聞くんですよ。本当はこれやりたかって思ったんだけど、先生とかに軌道修正されちゃいましたとかいう。それって若干もったいないと思う。本当に生徒自身が関心持っていることに寄り添える仕組みがあるといいと思う。

委員：総合的な探究の時間ということですね。去年、南高校の探究の時間で、弘前学院大学で何日か看護学部と社会福祉学部が、助言というかそれなりのアドバイスをやっていたんですが、その中で、地域活性化をテーマにしていた生徒もいたような。

委員：関心を持った時に、相談先が学校の先生しか現状いないみたいな場合で、先生が地域のつながりとかがないと、ちょっと。

委員：そこがつながるようなのが、システムとしては良いのかなと。

委員：まちづくり以外のテーマを選んだ高校の他の子は、調べることで終わり。

委員：どんなテーマでもまちづくりに関連する感じはするんです。私がこの前、南高校の探究の時間で行き詰まっていた学生をフォローしてきた時は、K-POPとか、韓国にすごく関心があった学生で、韓国と地域を絡めてみても、韓国人居住者は若干名いるし、そういう人の定住についてサポートが必要だけど、それがないという話や、韓国人観光客向けの情報発信が弱いとか。

委員：特にみなさんはそれぞれ、進学を考えていらっしゃるでしょう。だから先生もそちらの方が主になるので、その専門知識がある方というのを学校側が先生でなくても来ていただくのが良いと思います。食品の方だったら調理の方でも、加工の方でもその技術を持ってる方をサポーターとして、県立だったら県の登録をすとか、弘前だったら弘前の出前講座というのがあって、それにいろんな方が登録してて、お願いをすれば講座に来てくれます。そういう感じで、高校に出前講座の相談ができるみたいな、人脈のリストみたいなのがあれば。

委員：今はないんですか。そういうのはあったほうがいいですよ。

委員：多分難しいんだと思うんですよ。要はその時ずっと地域が活性化していくのって、その地域と先生方で、やっぱり密着度が高いといいですけど、それって人事的に密着度が高いと問題が起こるので人を回すじゃないですか。だから難しい。

委員：前にトラブルとして聞いたのは、ちょっと言いにくいんですけども。あそこの企業さんがいいみたいな話でそこに生徒さんが集中しちゃったという話があります。

委員：満遍なくは難しいですね。

委員：どこか一か所に集中してしまうと相手側に迷惑をかけてしまうかもしれないです。うまくコーディネート、分配してあげる必要があるのかもしれない。

委員：例えば、高校の専門の先生だったら自分の知ってる専門の学校への大学のパイプとかって強いじゃないですか。大学の先生も企業とか研究機関とかのパイプが強いじゃないですか。そこを学生が関わる時に、人脈を横に広げられることができれば良いと思います。

委員：自分の探求の時間の時は、自分でアポイントをとって、自分でインタビューしていました。

委員：テーマによってやりやすさが違いますよね。もともと私がネパールに住んだ関係で大学時代に国際系をやってて、中には国際協力とか国際交流とかに関心ある学生がいたんですが、地域のどこにヒアリングに行けばいいのか分からないというのがあって。たぶん土手町の活性化とか農業者とかだと行きやすいんだけど、そうではないテーマだと当時は難しい問題がありました。

委員：何に関心があるのかを発信できない。自分がこうしたいというのを発信できる人は自分がしたいから発信できるけれども、思っても発信できない人が沢山いるんですよ。

委員：多分、壁打ち相手になってあげて、自分の好きなことはこうなんだということを表面化するためにはサポートが必要かもしれない。そこが表面化する学生は、さっき言ったHLSのステップとかにも、行きやすいのかもしれない。多分お父さんとかいろいろな人といろいろな会話を通して、〇〇さん自身はこれがやりたいんだけど、というように決めていくけれども、そうじゃない学生については、対話を通して何がやりたいのかを言語化していくことが必要なのかもしれません。そこらへんがぼやっとしてる方だと、何かやりたいことがあるかと聞いても、いや特にない、ということで終わってしまう。

委員：結構気付くのが遅いんですよ。どうしたらいいかが分からないというのが学生です。楽しみたいし。

委員：気になるのが、弘前学院大学もちょっと聞きたいんですけど。それこそ地域交流的なサークルがすごく多いという記憶があるんですけども、今は地域に関わるサークルとかどうですか。

委員：名前が出てくるような気はしますが、地域活性化サークルとかの名前があって、キッチンカーとか販売とかやっているような感じで、実際に地域活性化サークルというのが存在します。

委員：私の同じゼミの学生は、弘前マルシェというイベントをやっている学生とか、ヒロロのマルシェのイベントにも参加しているんですが、その時は学生主体でワークショップとか全部やっていました。

委員：ちなみに今っていわゆるインカレサークルって、「いしてまい」以外にあるんですか。大学の枠を超えた、弘前学院大学や弘前医療福祉大学とか柴田学園大学とか、そういったいろんな学生が入ってるサークルのことです。

委員：昔は部活動する方々のスポーツ系はありましたよね。

委員：今はコンソーシアムがあります。

委員：コンソーシアムだけですかね。

委員：少し近いものはあるんですが、でも、もう全然ないんです。

委員：弘前学院大学の学生は結構、弘前大学のサークルにも所属しています。

委員：一緒になっているのはありますよね。

委員：吹奏楽部が今年から弘前学院大学で立ち上がったんですが、去年までは弘前大学の吹奏楽部に入っていました。ですから、弘前大学のサークルに入ってもらってというのが沢山ありますね。

委員：前に柴田学園大学短期大学部の学生から相談を受けた時に、児童保育に関心があって地域活動したいって思っても、短期大学部にサークルが無くて、弘前大学とかに加われたらいいんだよなという話になったんです。今は大学の枠を超えて入れるという感じになったんでしょうね。

委員：国立とは言いながらも、法人になってるので、弘前大学でもできないことはないですよ。

委員：「ぼくらしnext」みたいな学生団体とかであれば、大学の枠を超えているんですよ。

委員：前に桔梗野町会を軸にしたサークルも弘前大学の中にあったんですよ。

委員：桔梗野町会に特化してですか、いいですね。

委員：林間学校みたいに子どもと学生が泊まり込んだりしたんですよ。あそこの近くに住んでいる留学生も呼んだりして。町会とか企業とかにぶら下がる学生団体がもう少し増えると、いろんな大学も巻き込みやすくなると思います。昔は町会に関わるって結構ブームがあったんですよ。

委員：当時は町会が元気だったんですよ。コロナ禍以降は高年齢化しましたし。

委員：桔梗野になったのは、中野と桔梗野が会館を持っているから、そこで学生も出入りしてというのがあって、多分あそこ以外に会館で常駐しているところはあまりないんですよ。桔梗野会館が行きやすいということもあつ

て、もしかしたらそういう町会とか交流センターや公民館を軸にした学生の受け入れのノウハウが必要なのかもしれません。大学と地域の関わり、ノウハウがブツツと切れちゃって、昔のノウハウが今の学生に伝わっていないというところもあります。

委員：おそらくはあるとは思いますが。私はちょっとコロナ禍前のことは分からないんですが、おそらくは、かつてはそうであったんだろうなと思います。今はそういうつながりが薄いように思います。

委員：各公民館に公民館祭りってあるんじゃないですか。そういう所に、弘前学院大学や弘前大学のサークルの出張で、こういうのができますよというのを出せばよいのでは。

委員：例えば新和公民館は農学生命科学部のゼミが関わっていたんですが、コロナ禍をきっかけに交流が途切れたうえに、あっち方面のバスが廃線になってしまって、学生が公共交通機関で行けなくなってしまって。そういうのを昔やっていたということを今の学生が知れば復活することもあるかもしれない。

委員：地域の公民館の祭りで弘前学院の方から地域のお手伝いをしますというのが来ていたんですが、祭りがなくなってしまったので、地域の動きを経験できなくなってしまいました。

委員：確か前に公民館でストリートダンスサークルのアクトという団体がいましたよね。

委員：今はそのお祭りがないので。

委員：もしかするとよさこいとかストリートダンスサークルとかを披露する場所というのが少ないのかも。

委員：やっぱりあった方がいいですね。子どもたち、学生の地域を盛り上げて自分たちも一体感で盛り上がっていくという士気が地域を盛り上げていくというか。

委員：逆になくなった理由はなんですか。

委員：コロナ禍ですね。

委員：〇〇先生に聞いたんですが、コロナ禍があってお祭りとかがなくなってしまったことで、コロナ禍が明けた後でどうやって復活するのが重要になってきているようです。

委員：地域の話になるんですが、地域の町会では個人で情報を入手するので、みんなでまとまって何かをやらないと暮らしていけないという世の中にはないんですよね。共働きも当たり前に増えてきているので、地域のことに参加して何かをやるというのはすごく難しい。継続していくのが大変で、職員が相当頑張っている。

委員：多分、清水公民館も今まで我慢しながらやってて、コロナ禍をきっかけにやっと辞められるみたいな感じですかね。

委員：清水公民館の下機関がやっていたんで、昔運動会をやっていたりとか、そのお祭りとかには業者がほとんど入らなくて地域の人たちが屋台を出して。

委員：清水公民館の祭りとかが停滞した要因としては、コロナ禍でノウハウが途切れたのが一番大きいんですか。

委員：コロナ禍で辞めているうちに、やっぱり年齢が上がって。年齢等は若い方でまわしてるんじゃないじゃないですか町会って。続けていると頑張れるんですけれど、一旦休んでしまうともういいかなというふうになるんです。そこをまたメンバーを組み直してやれるほど、活動に参加してくれる人っていないんですよね。みなさんやっぱり土日で行事をやるにしても、普段お仕事していると土日は土日でやることがあったり。

委員：本当に公民館祭りって昔の弘前大学のいろんなサークルが出入りしていたって印象がありました。まちづくり系の学生たちは関わるかもしれないんですが、アクトみたいなダンスサークルってあまり地域に関わる機会がない中で、貴重な機会だったと思います。

委員：もう公民館祭りとかいろんな知恵とか協力を得ながら復活をさせていく

っていうところが、学生とかには必要なのだと思います。

委員：多分ですけど、公民館側の職員側としてみれば、催しをしてくれる方々がこんなにありますよということが分かれば、自分たちは企画として要請をすればいいだけなので楽じゃないですか。そこら辺もどこを頼むっていうのも結構悩みになると思うし、悩みどころなので、情報がないんだと思ってますよ。どこに情報を取りに行ったらいいかわからないのはあると思う。

委員：初めて大学にSOSするにあたってどこに声かければよいかとか。

委員：窓口はどこなのかなって画策しなければいけないと思うので、そうですね。これ前にも言いましたね、公民館とか地域のまちづくりなんだけれども、どこに何をお願いしたらよいかわからないということです。

委員：〇〇さん大変かもしれないけど、学生と地域の団体をつなげるためにはどうしたらいいかというところだけでも、大学にも地域づくりサークルとかが結構ある中で、そういったものをしっかり大学内でも周知して入りやすい体制を作るのが大事かもしれないし、大学間のそういうネットワークを超えてインカレサークル的なところをもっと活性化するのも大事な、みたいな感じですね。

あとは民間の企業とか団体ごとに、関係する学生団体があると、いろんな大学生も入りやすいかなと。あと、昔は町会や公民館とかを軸にした学生とかの集まりもあったけど、今はコロナ禍によってノウハウが途切れてしまったんで、そこら辺のノウハウを掘り起こして、そういったイベントとかを復活させてというのが大事な、という感じですかね。

### <グループ3>

①まちづくりに関心がないまたは参加したいと思っているが何をしたいかわからない学生や子どもがどうしたらまちづくりに参加するか。

委員：そうすれば、今日はテーマ2つで、先ほど言った、まちづくりに関心がない人、または参加したいと思ってるが何をしたいかわからない学生や子どもがどうしたらまちづくりに参加できるかというのが1つ。あと2つ目は、皆さんのような活動をしている主体と学生や子どもをつなぐにはどうすればいいか。これ、もしかしたら意見が被ってしまうかもしれませんが、

あまり気にせず発言していただければと思います。2つについて1つずつ行きたいと思いますので、何とかよろしく願いいたします。

1つ目を考えるときに、関心がない人、参加したいけど何をすればいいかわからない人って、子ども、学生、関心がない子どもにどうすればいいかわか、参加したいけど何していいかわからない子どもにどうすればいいかわか、逆にもいいです。逆にその学生でもいいです。どうも考えがまとまらないなと思ったら部分部分でおっしゃっていただいてもいいです。あとは、この子どもと学生は、一応この条例の中では、子どもというのが高校生までになっていて、学生というのが高校卒業した後の大学とか専門学校とかの子たちを指す言葉になってます。

委員：地域の町会の話で言いますと、子どもたちとの接点は、子ども育成委員会や子ども会というのがあります。具体的に何をやっているのかというと、学校教育でできないような体験をさせるということで、三沢航空科学館に行ったり、大鰐のスキー場に行ってスキー教室をやったりしています。まったく無料での参加ではないですが、かなりの金額の補助金を出して、運営しています。

委員：子どもたちと関係がある組織を通じて、機会を創出して参加しやすいように地域で補助金を出していくってことですね。

委員：自分たちが事業をやるときに気にしている目線が、親御さんが子どもを参加させたいと思うかだと思います。高校生くらいまでになると、自分で行きたいものに行くと思うんですけど、小さい子どもは関心がないというよりは、知らないんだと思うんです。参加してくれれば割と楽しんでいただけるので、連れてくる親御さんがこれいいな、楽しそうだなって思えるのが大事だと思います。自分たちで実施した職業体験イベントも親目線で考えているもので、親御さんが子どもを連れていきたいなと思ってもらえるような感じだといいのかなと思っています。

委員：実際子どもは自分でなかなか行きたいとかはないと思うので、親にアプローチを。確かにスキーなど、自分で連れていけなくても、行けるとなると親からすれば良いですね。先ほどおっしゃっていた、町会の子ども会の運営費みたいなところは、どうやって確保しているんですか。

委員：学区まなびい講座というのがあります。これが何かというと、弘前市全

体に公民館があちこちあるんですよ。市街地における11の小学校区を単位として、地域住民が主体的に講座の企画や実践に取り組み、参加者とともに様々な活動を通じて学び合うことで、よりよい地域づくりと人づくりを目指すものです。

委員：僕らが良く知っているのは1%システム補助金で、町内会単位でも活用してみて、子どもたちが参加できるイベントとかやってみてもいいんじゃないかなと思います。

委員：実は町会で1%システム補助金を活用してまして、ゴミステーションに資料が掲示できるような掲示板を設置したんです。町会内の情報格差がないように。

委員：〇〇さん、いっぱい活動されていますけども、例えば参加したいけど何をしたらいいかわからない人へのアプローチとかありますか。

委員：そもそも私がまちづくりに興味を持ち始めたのが高校生の頃で、廃校になった学校でお化け屋敷をやろうという企画に友達から誘われて参加したことです。実はこのイベントを企画した団体が地域を持ち上げようと頑張っている方々っていうのを後から知って、まちづくり活動をやっているの知らないで参加していた経緯があるので、関心がない人に関してはまちづくりというアプローチではなくて、いろいろな枝葉を伸ばしてキャッチしにいく、例えば、学校教育で体験できないこと、職業体験などもその一環だと思いますし、自分の好きなことなど様々な枝葉があると思うので、その部分にまちづくりのきっかけの種をまいていけばいいのかなと思います。

委員：あまり最初からまちづくりって言われると引いてしまうけど、面白いことが実は仕掛け人の方でつなげてくれる、入口がすごく入りやすい感じにすれば良いということですね。〇〇さんのところでは、学生などと接する機会はありますか。また、もっと学生に関わってほしいなと思う部分がありますか。

委員：高齢者対象なので、あまり学生と接する機会はないです。

委員：健幸増進リーダーはちなみにどういうことをされているんですか。

委員：簡単な体操を通じて、健康寿命を伸ばしましょうという活動をしています。私自身も10年くらい活動していて、他の方も結構年齢が上がってきていますが、町会などに対して公民館などの集まれる場所で、社会活動をしています。

委員：自分自身あんまりやったことがないんですけど、子どもたちが夏休みになるとラジオ体操やったりしてるじゃないですか。

委員：自分の地区は、11町会のうち10町会やっています。やっていない町会は、子どもがいないからやっていない。

委員：参加者集めるにはどうしているんですか。

委員：学校からの案内や観覧板で周知しています。

委員：ラジオ体操について、夏休み期間だけやるのではなくて、毎週日曜日の朝はみんなでラジオ体操しようみたいなイベントを企画してみるとか、そういうものがあると良いのかなとか。インドア派の生活を送っているとゲームとか楽しいことはありますけど、身体を動かす系があっても良いのかなと。

委員：〇〇さん、先ほどおっしゃっていましたが、今年はわくわくキッズパークは、どのようにアプローチをかけているんですか。広く集めるときには、どこに焦点を充てているのか。

委員：基本的には、親御さんは子どもたちを遊ばせるところを求めているという需要が高いので、親御さんがこれをどこで見るかなと考えた時に、インスタグラム、若い親御さんが見るのはやっぱりSNSかなということでやっていて、そこに注力しているかたちです。

なので、広報ひろさきとか、テレビ、ラジオとかでやってもらうのもいいとは思いますが、実際に自分たち世代がテレビを見るかどうかみたいなところもあって、30代、40代となるとメディアが代わってきているかなと思います。

いつもは学校に教育委員会を通じてチラシを配布したりしていたんですけど、今回はインスタグラムとホームページだけで、周知を行いました。

それでもかなりの人数が来る。インスタグラムの広告は、弘前市の30代に絞って広告を流すことで、親目線でこのイベントいいじゃんというふうに目に留まりやすくするという取り組みを行いました。

委員：子どもたちの興味が向くような、先ほどのまちづくりを意識させないようなもので興味をひかせて、ただそれを発信するときには子どもたちに直接伝える、参加できる方法、町会の組織とかを使ってというのものもあるけれども、親をターゲットにして、方法としてはSNSが今は有効的であるという感じですね。

委員：〇〇さんのお話を聞いていて思ったのですが、健康増進とかも、学生で参加したいけど何をしたらいいかわからない人、関心がない人、どちらにも当てはまると思うんですけど、まちづくりというものから遠いところにいる、例えば、ずっとスポーツだけしていたなど、健康増進のキーワードとしては近いけどまちづくりとしては関わらなかった人と一歩つなげられれば良いと思います。キーワードを拾ってつなげていければつながると思います。

委員：テーマをですね。確かに健康づくりというのは高齢者だけではなくて、子どもから対象になってくると思います。

委員：私も町内会に入っていたんですけど、人が少ないという理由で町内会が無くなってしまって、それがきっかけでねぷたとかいろいろな祭りなどから遠ざかってしまいました。今、町内会がない地域に住んでいる方々に対するアプローチとか、普段どうされているんだろうと思うことがあります。意識していることがあれば教えていただきたいです。

委員：今は高齢化が進んでいるので、何個かの町会が一緒になって活動をしたりしている。

委員：確かに〇〇さんが言うとおりの、町内のいろんな組織があれば連携はできるけど、そこ自体がなくなってしまうと、あとは学校しかつながりがないということですね。

委員：学校教育だけですね、あとは、団体とか。機会があれば参加するみたいな感じですね。

委員：SEEDS NETWORKさんも子どもを対象としたイベントを企画されていますよね。

委員：やっています。

委員：その時は、こういったアプローチをしているんですか。

委員：アプローチ自体はSNSで、継続している事業が多いのでリピーターの方が参加してくださるのが多いと思います。

委員：SNSの利用とかありますけど、16歳以下はSNSを制限するとかありますし、現実、広報とか作っていろいろな取材をする場合に、この子どもは映してはいけませんとかあって、ピリピリしている部分もありますので、この写真の使い方とか明記したり、この時代の中でSNSの利用方法とか、非常にナーバスな状態になっていると思います。

委員：先ほど審議会が始まる前に、町会の行事の中で弘前大学教育学部の学生が18人参加されたというお話を伺いましたけれども、それはこういったつながりで集まったんですか。

委員：たまたま町会員の中に弘前大学の知り合いの方がいて、来ていただいている感じです。町会の旅行や、バザー、スキー教室に参加していただいています。あとは、高齢者対象のフレイル予防として弘前学院大学地域社会学の学生が包括支援センターを介していろいろとやってくれています。

委員：それこそ学生のメリットではないですけど、学んでいる事を生かせる場を提供してあげるというのは、つながりやすい、参加しやすくなると思いました。興味が無くても、自分の学んでいることを生かしていくというのは、入っていきやすいっていうのがあるかもしれませんね。

②学生や子どもとまちづくり活動をしている主体（町会、活動団体、商店街など）を繋げるにはどうしたらよいか。

委員：皆さんと学生や子どもをつなげるには、逆に皆さんの方からすればつながるにはということになると思いますけど、どうしたらいいかということ

で。

私は社会福祉協議会なんですけど、ボランティアの場を求めているというのが多くあります。これも、自分の経験を積むというのものもあるし、進学のときのとか、意外とボランティアするにはどこに行けばいいのかなっていうものもあります。ヒロロには市でやってるボランティアセンターってのがあったりするんですけど、そういうのがなかなか情報としてわかりにくかったりもするので、情報発信が必要だと思います。弘前大学のボランティアセンターがあって、そして市の方にもボランティアセンターがあってそこは連携して思う。

そういうふうなものがせっかくあるので、そういうところを活用していけばいいのかなと思います。青年会議所さんとかはなんかメンバーが様々な分野がいらっしゃるので、中での情報とかいっぱいありそうですね。

委員：会員が基本的に会社をやっている人で、県内だと子ども園やってたりとか、そういった方もいるんですけど、ちょっとボランティアは今いなくてですね。

あるいは、ボランティアじゃないですけどボランティアみたいになっているのが、花火の集いですね。学生あるいは弘前の青年団体が集まった団体を一つ作って、それで主催みたいなかたちになっているんですけども。それは結構、自分たちでイベントでやっているようなところがあって、予算は入場料いただいてですけども、それ以外のボランティアも、それこそ大学生の方に来てもらったり、市役所の方、企業の方に来てもらったりして、ボランティアの場としてはすごくいいのかなと。その場で花火を見れるし、その次の日はごみ拾いとかがまでしてもらいたいなかたちでたくさんの方にボランティアとして関わってもらっています。

委員：SEEDS NETWORKさんとかはもう基本的に学生ボランティアさんいっぱいって感じですか。

委員：下部組織の学生団体はあるんですけど、人数が少なくなっています。ボランティアは知り合いとかにお願いしている感じです。

委員：〇〇さんのところは、お仲間とどのようにつながっているんですか。

委員：養成講座があって、講座を受講した方や、募集して興味がある人とのつな

がりという感じです。

委員：このつなげるっていうのは、どういうふうな感じでやればいいのかっていうのが一番、今言ったとおり、多分知ってくれと、参加はしてくれると思うんですよ。そういった方たちは。ただ、そこが見えない状態になってるってのが一番問題なのかなと思うので。プラットフォームみたいなのがあって、アクセスしやすい、何日にこれやって、これ募集してるんだとか、そこをポンと押してポンッと押したら、もう参加できるよみたいな、それこそボランティア版タイミーみたいな、ボランティアマッチングみたいな。

委員：アナログですよ。

委員：雪かきとかりんご作業とかみたいなもので、マッチングする機会を公共で増やしていく。例えば、僕はあんまり知らないんですけど、桜祭りのときも、ガイドや車いすとかのボランティアを、弘前市は四季のお祭りがあるので、応用するとか。いろいろな活動を集約して、そこを見れば、なんか、来週これあるんだ。だから行ってみようみたいな。今は、ここ、ここ、ここって全部自分で情報を取りに行かないといけない仕組みで、それぞれが広報を頑張ってるけどなかなか難しい。

委員：情報をまとめたセンターみたいなのがあればいい。

委員：本当はボランティアセンターがその役目を担ってもらえればいいんですけど、そこまでなっていない。

委員：参加応募フォームがあつてつてなると、それがそのまま応募したというか主催団体の方に応募がありましたみたいなのがすぐ見れるみたいなフローができるといいと思いますね。

委員：結構タイミングとかは大事ですよ。ここはやれるけどここは無理だとかつてなっちゃうと。

委員：私が学部の人に作った、学生が何をしているかをまとめたサイトがあるんですけど、やっている側と応募する側の透明性を担保するために、募集する、募集されるという前段階で、地域にいる団体がどういう団体で何をし

ようとしているのかみたいなどころまで公開して。途中経過を載せて、その内容に興味を持った人が見るみたいな一步前のプラットフォームがあっても良いのかなと思います。

委員：子どもとか学生が興味持ちそうなことって具体的にはどんなことだと思いますか。

委員：遊び。

委員：親御さんが興味を持つもの。

委員：弘前高校の生徒がマイクラフトで弘前を表現するっていうので表彰されていたりしていて、クリエイティブみたいなどころもあるので、弘前でコンテストを開催したり、弘前のまちを再現しようみたいな活動すると、弘前のまちを知ること、子どもたちはその遊んでるつもりで、そのまちづくりもというふうな、両取りみたいな。学生が審査する側みたいになると、もう全部取れるんじゃないかな。三方よしになるっていうの。

委員：この条例の中でですね、例えば学生とか、事業者とか市民とかってのはそのまちづくりの主体になってまちづくりをしましょうと言ってるんですけど、子どものところだけは条文には権利がある。まちづくりに参加する権利、機会を与えてもらう権利があるんだとして、役割としては、そこで経験を積むことだっていうところは子どものところなので、機会を与えたり、参加する機会をつくっていくというのは一番大事になると思います。

<発表>

会長：それでは皆様、各グループで話し合われた内容について発表していただきたいと思います。それではまずですね、2グループの方から、お願いできますでしょうか。

委員：よろしくお願いします。まず、学生とか子どもがどうしたら参加するかっていうことを話し合ったんですけれど、順番ちょっと変わりますけど、まず学校に入学したときに、先生方から情報を提供してもらえるように、先生を通して、いろんなこういう、参加できるものがありますよっていうのを先生を通して話していただくと。それで、そのことが自分の経験として、将来受験をするときにでも推薦なり何なりの評価を受けることができる

みたいなのを先生にまず言っていたきたい。

何故か。親が言っても聞かないからです。先生が言うこと、塾の先生が言うことは、そうなんだって言ってとってもよく聞いてくれるんですけど、もう体験をしている、親が言っても、子どもは聞きません。ですから、そういう影響力のある方に情報をたくさん入手していただいて、学校側からそういう情報を発信していただきたいたいというのと。

あとそれから先ほど申しましたが、それが積み重なって、自分が将来受験のときとか、いろんな企業に就職するときにとってもプラスになりますよっていうことを経験していただきたいたいということと。

例えば色んな紹介があっても、座学だけではやっぱり面白味がない。実際、企業さんの方に入ってみて、それで経験してみたことが、学生にとっても、企業側にとってもPRという面でもプラスになりますし、学生としては経験という点でプラスになるので、そういうふうに関係に百聞は一見じゃなくて、多分一见よりも1回やってみるっていうそちらの方の経験してみるっていう方を重視して、やったほうがいいんじゃないか、そちらの方を重要にしたほうがいいんじゃないかっていうことと、そういう経験っていうのは、なるべく早いうちに、高校生、大学生もそうですけれども、中学生、小学生のうちから取り入れて、例えば小学一、二年のときはそういうものがあるという知識だけ。三、四年生の頃になったら、こういう方向でやってみたらどうかっていうのを考えてみたりとか、経験したりとか。五、六年生だったら、実際に販売してみたりね、育ててみたいという実績を経験してみるっていうことも、地域を作るにはとても重要なんじゃないかっていうことが話されました。

それと、ここはとっても後にもつながって重要だと思うんですけど、実は中学生とか高校生って、小学生もありますけど、企業さんとか業務体験インターンシップっていうのは結構されてるんですよ。ですけれども、大学生のインターンシップを引き受けてくださる企業さんが少ないんじゃないかなっていうのを感じまして、実際、私は1回しか聞いたことないですし、でも地域のこの学都である大学は何校もあるんだから、地域の事業主さんと提携を組んでインターンシップを受けてくださる企業さんがたくさんいらっしゃれば、学生さんの持ってる考えとかも取り入れられますし、これからの若い人がどういうことを考えてるのかなっていうことも、企業側さんもわかりますし、プラスになることが多いので、弘前市とか、あと商工会の方とも連携を組んで、こういう事業者さんがインターンシップを受けてくれるところ沢山ありますよっていう情報をホームページを使ってでも発信していただけたらいいんじゃないかなという意見が出さ

れました。

委員：②に移ります。②の学生や子どもと主体をつなげるにはっていう議題では、大学には地域活性化サークルや、弘前ばなしっていうイベントを開催しているサークルもあるので、そういう大学間での交流とか協働ができるサークルがあるっていうのをもっと発信していく、ということが必要だよねっていう意見と、民間には私が所属しているぼくらしネクストっていう学生団体があるんですけど、そういう大学間の交流のある団体が存在しているので、そこにもっと大学も組み込んでいければ、つなげていけるのではないかっていう意見が出ました。

3つ目に町内会の話になりまして、桔梗野町会では学生を受け入れたりしてイベントとかやったのがあるらしいので、そういうのがあったのにもかかわらず、コロナ禍によって途絶えてしまったっていう状態であるので、そういうのが復活できるように、公民館の利用とかの公民館まつりとかで発信して、大学生ももっとサークルとかもたくさん協力してつないで学生と子どもと主体的につなげていければいいんじゃないかなという意見が出ました。以上です。

会長：ありがとうございます。それでは次ですね。お願いします。

委員：学生や子どもがどうしたら参加するかっていうところなんですけども、学校教育で体験できないことを実施することが大事だよねとか、親子で参加できるような取り組みが大事ということがあります。

先ほど子どもは親の言うこと聞かないって言ってましたけど、ぼくらの目線からすると小さい子どもたち、小学校低学年とか、そういった子たちはやっぱりまだ、親がどこかに連れて行って体験をさせるっていう機会が多いんじゃないかと思います。子どもと学生というふうに分けたときに、子どもたちっていうのは、そういった、親目線でも連れて行きたい場所というふうにしていくと、そこに参加して、その子たちは、まちづくりっていう意識はないにしても楽しさで体験してもらって、いろんなところに参加して楽しんでというふうなことができるんじゃないかなと。

そういう職業体験の場とか、あとは夏休みに実施している町内会で先ほど聞いたら、町内会でラジオ体操やったりっていうふうに、聞いてたので、学校じゃなくて、地域でやったり、他の団体でやったりっていうところをもっと発信して、それで連れていくというふうなものいいのかなと思います。

あとはどうしたら参加するかっていうところなんですけども、やっぱりちょっと親目線になってしまうんですが、SNSの活用。学生もやっぱりSNSで、かなり浸透していると思うので、インスタとかでこういうことをやってるよとかというのを見て、それを学生にターゲットを定めるのか、小さい子どもを持ってる若い親目線、親をターゲットにするといったことを考えながらやると、もっとそこに焦点を定めて、学生とか子どもとかが参加してくれるんじゃないかっていうふうなところを話をしました。

1から2に移ります。実際学生や子どもと主体をつなげるにはですけども、1つは、先ほど言ったようないろんな試み、まちづくりのための試みってのは行われてると思うんですけども、それをつなぐ接点、アクセスする場がちょっとないんじゃないかという話が出ました。例えばですけども、ボランティアの場を求めている学生さんとか、そういった人たちは結構いるとは思いますが、来週何があるのか、来月何やるのっていうふうなのがちょっとわからないっていうふうな状況があるのかなと思って。そういったボランティアだったらボランティア向けのプラットフォームのマッチングサイトを作るなりしてそういった接点を増やすっていう試みをしていけば、その学生さんたちもそこに参加できるし、その主体となる団体とか、地域もそういった人たちがもっと来てくれるようになるというように、どちらも良しというふうになるんじゃないかなと思っております。

あとはちょっと前後しますが、出た意見としては学んでいることが生かせる場を学生に提供するっていうのが大事なので、簡単に言うと大学生が自分たちが学んだことを地域に還元するみたいな、人文系の経営学とか学んでる子たちが土手町と一体となって、再生の何か体験をしてみるとか、弘前学院大学の福祉の観点から大学内の学生とつながりを持ってるっていうふうな、実際にやっていることがあったのでそういったところを、もっとつなげていったりというふうなところをしていけば、こういった2番の方の学生っていうか学生と子どもと主体になる団体さんをつなげることが、できるんじゃないか。

学生さんだともうちょっとまちづくりっていうのは意識をするかもしれませんが、若い世代、その未成年の子たちっていうのは、自分たちでまちづくりしようって言ってまちづくりするというよりは、自分たちで何か楽しいことに参加するっていうところが、実はまちづくりにつながってるんだよっていうふうな意識付けというかそういった、狙いっていうのが大事なんじゃないかなと思います。はい。私たちの意見は以上となります。

会 長：ありがとうございました。

委 員：私たちのところでは、まずまちづくりの条例を知っている人が多くいないのではないかという意見が挙がり、何がまちづくりかわかっていないところが多いのではないかということになりました。なので、まちづくりとは何か、というのをメニューで提示する。ホームページに載せるだけではなく、働きかけるようにしていければいいのではないかという意見が出ました。

後は親子で参加できるものがあれば、間口が広く、子どもから親にこう一緒に行こうっていう働きかけができるのではないかという話になりました。

問題点としては、関心がない人に働きかけるのは、何の活動においても難しいことが多いので、そこはもう少し考えていかなければならないのではないかということになりました。

次、②の方ですが、市がモデル事業として提示し、大学のインターンを使ってまちづくりを行い、それをモデル事業としてまちづくりをやっているのではないかということ。

他には大学の先生がいらっしゃるので、ガクチカという言葉を使い、学生が、学生時代に一番力を入れたことを就職に有利にするために、ガクチカという言葉を使うと、そういうまちづくりに参加してくれる学生たちもいっぱいいるのではないかという意見も出ました。

後は市と市民を接続するコーディネーター。横浜の方ではまちづくりコーディネーターというものがあるみたいなので、そういうのもいた方が、市役所の職員さんは3年で異動するし、大学生は4年でいなくなってしまう人も多いので、継続してつないでいける人がいた方がいいのではないかという意見になりました。

会 長：ありがとうございました。本日はですね、ワークショップ形式の審議ということで、皆様ですね、貴重な意見を深くいただくことができてとてもよかったと思います。これまで以上にですね、たくさんの意見を、いただくことができたと思っております。今回初めての試みですがこのワークショップのケースはとてもよかったのではないかと私は思っております。それからですね、最後の発表ですね。こちら時間の制約もありましたので、発表できてないこと、これもかなりあるはずです。こちらの意見ですね、記述してありますので、しっかり記録してですねまとめていただきました。

いと思います。

そしてですね、今後、今回の意見についてですね、1つでも実現させていただければということを願っております。

本日は長時間にわたり、当審議会のスムーズな進行にご協力いただきありがとうございました。